

朝鮮釜山から引き揚げた私

望月 節子

私の家は、日韓併合になる前から朝鮮に移り住んでいました。父と母は、明治 36 年生まれで、朝鮮の釜山で生まれました。おじいさんは徳島県出身、おばあさんは山口県の生まれです。若い頃朝鮮に渡り、コッコツと働いて財を成した人です。父は山口の高等商業(今の山口大学)を卒業して、釜山の中学校の英語の教師でした。結核で 7 年間転地療養の末 39 歳で亡くなり、私が女学校一年の時でした。

大東亜戦争が始まったのは、小学校六年の 12 月 8 日です。その前、昭和 12 年には日支事変があり、南京陥落で提灯行列をしたのを憶えています。

戦争はだんだん激しくなって、釜山でも警戒警報は毎晩のようで、眠れぬ夜が続きましたが、爆弾が落とされたのは一軒だけで、直撃弾で一家が死亡しました。

昭和 20 年 8 月 15 日、重大放送がい昼にあるというので、町の中は右往左往でした。

兄は、以前から日本は負けると言っていましたから、母に銘じて銀行から預金を引き出すよう指示しました。母が銀行に行くと、銀行員は何も知らず、怪訝な顔をされたそうです。

母の友人は、満洲に疎開する用意をしていたので、早く荷物を送るよう催促に出かけました。お昼になって、ニュースは戦争に負けたことを知らせ、町中は一変しました。

日本人は外を歩くのをおそれ、みんな家の中に引きこもっていました。翌日から道庁の前では大勢の人が集まり、朝鮮が独立したことを喜び、バンザイ、バンザイと叫んでいました。夜になって、そっと道路に出てみると、山の上から白い煙が立ちのぼり、昼も夜も軍の書類を燃やしているのが見えました

家の隣に住んでいた軍の大佐一家は、翌日のうちに九州に引き揚げてしまいました。母が、七輪の灰まで持って帰ったと怒っていました。日本軍は一番先に逃げ出しました。

兄は、女、子どもの家族だから、早く帰らないと危険だと言って、ヤミ船を探して暁部隊の 28 トンの機帆船を探してきて、8 月 25 日に五世帯で釜山を出ました。(満洲から日本に運ぶ軍の大豆船です。)

その夜から激しい台風に見舞われ、木の葉のように船は揺れ、一日、二日漂流して、大きな船に助けられ、対馬に着きました。嵐の過ぎるのを待って下関にたどり着き、岸壁では朝鮮の人たちが、大八車で帰ってくる荷物を運ぶ用意をしていました。日本人が意気消沈している時、朝鮮の人たちは稼ぎ時でした。

町は一面焼け野原で、三菱銀行の建物だけ残っていて、中から手を振る人がいて、父の姉が嫁いだ家の主人だったのです。母もびっくりして、とりあえず徳山の富田のお宅に身を寄せさせていただき、一ヵ月後、祖母の出身地に帰りました。

平生の町はひっそりした塩浜の町で、翌年 2 月に柳井の町に家を買いました。

朝鮮が日本の植民地だったことなど、戦争に負けて初めて知ることができ、生まれ変わった自分になれたことは、幸せなことだと思っています。